

霊宝館だより

題字・畚野光義師



高野山根本大塔上層階から望む陣ヶ峰と的場山

霊宝館だより 第102号

平成24年4月23日発行
和歌山県伊都郡高野町高野山306
（附高野山文化財保存会
高野山霊宝館）
電話0736-56-2029
URL <http://www.reihokan.or.jp>

利用案内

■ 休館日	年末年始のみ	■ 開館時間	11月1日～4月30日 8時30分～17時00分 5月1日～10月31日 8時30分～17時30分
■ 拝観料	大人 600円 高・大学生 350円 小・中学生 250円	■ 専用駐車場あり	高野町に住民票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。

第102号 目次

特集陳列のご案内	2
収蔵品の紹介76	3
開催・販売のご案内	4
新指定の重要文化財	5
高野山の古建築 第六回	6
高野山の花折	7
よもやま話 vol.24	8
霊宝館の庭園	9
	10
	11
	12

特集陳列
越前丸岡藩主 本多重昭の奉納品
～重要文化財から羊の角?まで～
4月28日(土)～7月8日(日)
新館第2室・第3室

5月5日(土) こどもの日 小・中学生無料
5月15日(火) 開館記念日 無料開館
(国際博物館の日協賛)

※毎月21日（弘法大師の縁日）ご来館の方にプレゼントあり！

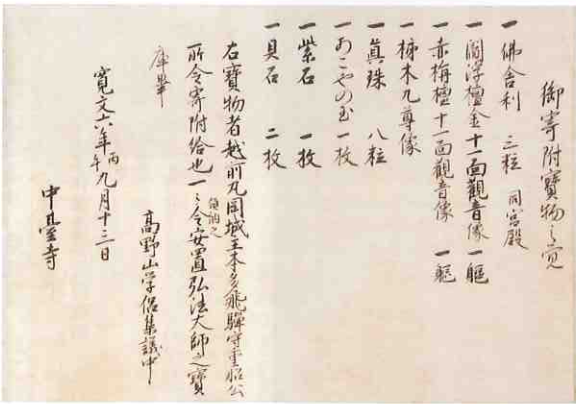
特集陳列

「越前丸岡藩主本多重昭の奉納品
重要文化財から羊の角?まで」

期間 平成24年4月28日(土)～7月8日(日)



重要文化財 釈迦如来及諸尊像(枕本尊)



国宝 続宝簡集第六四 本多重昭寄附宝物御影堂奉納 覽 書案



梨地鳳凰桃唐草文様紙胎合子

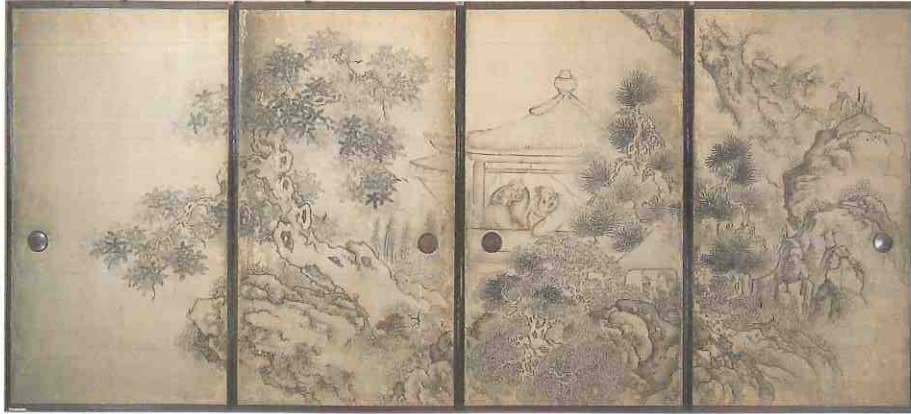
高野山は開創以来約二二〇〇年という長い歴史の中で、貴顕・庶民間わず数多の人々の信仰を集め、それを示すようにさまざまな宝物が奉納されています。現在多くの宝物が当館に収蔵されていますが、古くは伽藍御影堂宝物庫がその役割を担っていました。火災など度重なる危機をくぐり抜け、今に伝わる御影堂奉納品の中でもその数と多様さで異彩を放つのは、越前丸岡藩(現福井県坂井市丸岡町)第三代藩主・本多重昭(一六三四～一六七六)の奉納品です。今回その知られざるコレクションを一堂に展示し、名品から珍品ともいえるようなものまで、数々の奉納品をご紹介します。

主な出陳品

- 国宝 続宝簡集第八 本多重昭寄附宝物 覽書
- 国宝 続宝簡集第六四 金剛峯寺
- 重要文化財 本多重昭寄附宝物御影堂奉納覽書案 金剛峯寺
- 重要文化財 釈迦如来及諸尊像(枕本尊) 普門院
- 重要文化財 浮彫九尊像(柿木九尊仏) 金剛峯寺
- 未指定 梨地鳳凰桃唐草文様紙胎合子 金剛峯寺

十数年ぶりの公開！

国宝 池大雅「山水人物図襖」 全十面



山亭雅会図（山水人物図襖全十面のうち四面）

同時開催の小特集「江戸時代の絵画」に関連し、池大雅（一七三三～一七七六）筆「山水人物図襖」（遍照光院）を特別公開いたします。江戸期の制作になるものとしては、高野山で唯一の国宝指定となり、十面全て展示するのは十数年ぶりとなります。この機会にぜひご覧ください。

※山亭雅会図は6月3日(日)まで展示



時絵合子入真珠・白小石



金銅五鉗杵

同時開催

●小特集「江戸時代の絵画」

- 未指定 楼閣山水図屏風 狩野探幽筆 金剛峯寺
- 未指定 鍾馗図・鯉に滝図・古木に鷹図 狩野探幽筆 金剛峯寺
- 未指定 寿老人図・松に鶴図・竹に鶴図 狩野常信筆 金剛峯寺
- 未指定 四季山水図 貫名菘翁筆 金剛峯寺
- 未指定 群鶴舞図 岸連山筆 金剛峯寺ほか
- 未指定 9件22点

●平常展「密教の美術」

- 重要文化財 大日如来坐像（谷上大日堂旧在） 金剛峯寺
- 重要文化財 不動明王坐像（奥之院護摩堂旧在） 金剛峯寺
- 重要文化財 愛染明王坐像（青巖寺旧在） 金蔵院
- 重要文化財 四天王立像 快慶作 金剛峯寺ほか
- 重要文化財17件20点 未指定3件3点 計23点

- 未指定 金銅五鉗杵 金剛峯寺
- 未指定 時絵合子入真珠・白小石 金剛峯寺
- 未指定 両界種子曼荼羅図 金剛峯寺
- 未指定 十一面観音菩薩小立像（檀像） 金剛峯寺
- 未指定 木造五輪塔 朱塗六脚唐櫃入 金剛峯寺
- 未指定 水晶六角五輪塔 金剛峯寺
- 未指定 如意宝珠 宝珠形合子入 金剛峯寺
- 未指定 羊角 金剛峯寺ほか
- 国宝1件2点 重要文化財2件2点 未指定25件76点 計80点

収蔵品の紹介 76

重要文化財

うきばりきゆうそんぞう
浮彫九尊像こけらきゆうそんぶつ
(柿木九尊仏) 一面

平安時代 (10～11世紀)

縦 9・2 cm 横 7・3 cm

金剛峯寺蔵



浮彫九尊像

檀木の板にほとけを浮彫であらわし、木箱に納められています。別名の「柿木」は「こけら」と読み、屋根のこけら葺きのように木の種類に関係なく、木片や薄い板を意味する言葉に由来するようですが、本品を納める箱が黒柿できていたためこの名があるとの説もあります。阿弥陀如来を中心として、左右に観音・勢至菩薩、上に不動明王、下に大威徳明王、四隅に四天王を細部まで丁寧に彫り出しています。像の周囲にも菱形格子文が隙間なく彫り込まれています。

ポケットサイズの小さなもので持ち運びしやすく、諸尊の配置や組み合わせが独特であることから、制作の背景には個人の特殊な信仰がうかがえます。また四天王の甲冑が日本的であることから、中国唐時代の板彫像などを手本として、平安時代後期に日本で制作されたとみられています。

集陳列にて展示」によると、寛文六年(一六六六)九月十三日付で伽藍御影堂宝物庫に奉納された「柿木九尊像」がこれにあたりとみられます。本多重昭(一六三四～一六七六)は江戸時代初期の越前(福井県)丸岡藩主で、信仰心の篤い人物だったようですが、本品入手の経緯については不明です。

丸岡藩本多氏は重昭の息子、重益の時代に藩政が乱れ、改易(領地・城の没収、身分剥奪)となりました。高野山に数多く伝わる重昭奉納品も、奉納されていなければ散逸し、現存していなかったのかもしれない。目まぐるしく変化する世の中で、二〇〇年もの長きにわたり高野山が高野山であり続けていることとの凄さについて、改めて感じさせられます。

(F)

続宝簡集(国宝)第八と六四所収の「本多重昭寄附宝物覚書」や「同覚書案(特

開催・販売のご案内

夏期特別展にて、重要文化財「西界曼荼羅図（血曼荼羅）」公開決定！

重要文化財「西界曼荼羅図」（平安時代、金剛峯寺）は、平清盛がみずからの頭の血を混ぜて、胎藏曼荼羅の大日如来の宝冠を彩色したという伝承があることから、「血曼荼羅」とも呼ばれています。当館が収蔵する西界曼荼羅の中では最大で、縦横約四倍あります。この機会をお

見逃しなく！

（夏期特別展の詳細は、次号でご案内します）

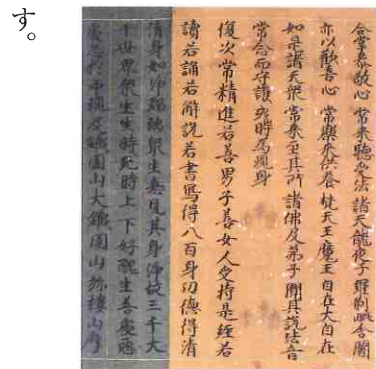
期間 7月14日（土）～9月23日（日）
会場 当館本館紫雲殿

東京国立博物館にて高野山の国宝「法華経」展示

東京国立博物館に勧告出品中の国宝「法華経巻第六（色紙）」（二巻、平安時代、金剛峯寺）が展示されま



胎藏曼荼羅の大日如来（中央）



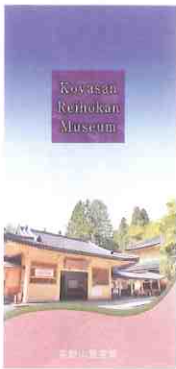
法華経巻第六（色紙）

す。

期間 5月29日（火）～7月8日（日）
会場 東京国立博物館本館2室

霊宝館パンフレット（日・英）がダウンロードできます

このたび、日本語版パンフレットの刷新とともに、英語版も作成しました。いずれも当館ホームページからPDFファイルでダウンロードできますので、ご利用ください。



英語版パンフレット

新しいオリジナルグッズできました！

当館のほとけさまの中でも人気の高い、孔雀明王と、深沙大將をデザインした金属製のオリジナルのおりができました。読書のお伴にいかがでしょうか。当館ミュージアムショップおよびホームページで販売中。一枚五百円。



孔雀明王（金色）



深沙大將（銀色）

新指定の重要文化財

執金剛神立像、深沙大将立像が重文指定に!!



深沙大将立像



執金剛神立像

昨年、快慶の作であることが判明した金剛峯寺蔵執金剛神立像が、この度、一具（セツト）の深沙大将立像とともに、重要文化財に指定されることになりました。

執金剛神立像は、昨年に実施した調査によって、胎内に「阿弥陀仏」という銘文があることが分かりました。「阿弥陀仏」は、鎌倉時代の名仏師快慶のことを指し、これによって本像の作者が判明しました。

本来、快慶が名乗った号は「阿弥陀仏」なのですが、本像の銘文は「阿弥陀仏」です。となると、快慶とは別人？と疑いたくなりますが、本像の銘文は快慶の自筆です。他にも自筆で「阿弥陀仏」と書いた例もあるので、快慶とみて間違いありません。

この発見によって、一具の深沙大将像も快慶作と確定することが出来ます。深沙大将像からは銘文が発見されていないのに、なぜ？と思われるかも知れませんが、深沙大将像は、執金剛神像よりもむしろ、快慶の作風が色濃く表れています。つまり、執金剛神像が快慶の作であることが分かれば、深沙大将像も快慶の

作で間違いのないとなる訳です。

両像は元々、高野新別所（現在の真別処円通律寺）の三重塔内にあったことが文献から分かります。新別所には、同じく快慶作の四天王像（重文・金剛峯寺）も安置されていたので、とても迫力のあつた堂内だったでしょう。

新別所は、鎌倉時代に平重衡によって焼かれた東大寺を復興する勸進を行った俊乗房重源上人が営みしました。執金剛神と深沙大将という特殊な組み合わせは、上人の個人的な信仰によると考えられ、全国にも他に一例しかなく、大変貴重です。

今後、夏頃に深沙大将像のみ当館で展示し（期間未定）、その後、両像とも二年程度かけて修理される予定です。（T）

お知らせ

この度の指定に伴い、深沙大将立像が、東京国立博物館にて展示されます。

特集陳列

「平成24年新指定 国宝・重要文化財」

4月28日（土）～5月13日（日）

東京国立博物館本館特別1室・2室

連載

高野山の古建築

第六回 重要文化財 徳川家霊台(一)

鳴海 祥博

現という神として祀られたからでしようか、右手の御霊屋には、唐門の前に鳥居が立てられています。

現在の南院のある場所には、江戸時代には「大徳院」という徳川家を壇越とする塔頭寺院がありました。徳川家霊台は、大徳院が自坊の裏山に建てた、檀家である徳川家康と秀忠を祀る位牌堂なのです。

大徳院の称号は、文禄三年(一五九四)に家康が高野に登った折に与えられたものでした。明治になり、大徳院はかつての蓮花院という旧称に復して今も法燈を伝えていきます。

高野山は豊臣秀吉に庇護を受けていました。やがて徳川の世となり、いかに新たな政権に取り入るか、それが高野山にとっての最大の課題でした。徳川家との接点を持つ大徳院の位牌堂建立は、徳川政権に忠誠を誓う高野山としてのとても重要なメッセージであつたに違いありません。当時、東照大権現を祀る建物の建立には幕府の許可が必要でした。徳川幕府に忠誠を誓う

証として、最も格式高い建築様式を用い、彫刻や飾り金具、塗装など当時の最高の装飾手法を駆使してこの位牌堂は建てられたのです。その建築装飾の豪華さは、寛永十三年に造替された日光東照宮に引けを取るものではありません。同じように見える建物でも、よく見ると向拝の彫刻が少し違います。中央の幕股の彫刻は、右手の家康霊屋は虎、左手の秀忠霊屋は兎の彫刻です。家康は天文十一年(一五四三)の寅年生まれ、秀忠は天正七年(一五七九)の卯年生まれなので、虎と兎は家康と秀忠を象徴しているのです。

虎の両脇には麒麟が彫刻されています。麒麟は王が仁のある政治を行うときに現れる霊獣とされています。家康の業績を称えた造形です。兎の両脇には虎が彫刻されています。秀忠は家康に守られた正当な後継者であることを示す造形のようなのです。

上には天女が舞い奏でます。ここは正に家康と秀忠の御霊が安らぐ浄土の世界なのです。



徳川家霊台全景



家康霊屋の全景



秀忠霊屋の向拝彫刻



家康霊屋の向拝彫刻

徳川家霊台は、高野山の中心、壇上伽藍から北へ尾根を一筋隔てた五の室谷にありま。高野山駅からバスで山内に入つてすぐ「浪切不動前」で下車し、南院の横を北に向かうと、高い石垣を巡らした敷地の上に、全く同じ建物が二棟、建っています。向かつて右が徳川初代將軍家康、左が二代將軍秀忠を祀る建物です。寛永一〇年(一六三三)頃から造営が始められ、寛永二〇年(一六四三)に落慶法要が営まれました。江戸時代には「おたまや(御霊屋)」と呼ばれていました。御霊屋は、正面三間、奥行き三間、宝形造、銅瓦葺で、正面に一間の唐破風屋根の向拝を付けています。どちらの御霊屋も同じ規模の瑞垣で厳重に囲まれ、正面に唐門を構えています。家康は東照大権

高野山の文化

高野山の花折

はなおり

前高野山大学教授 日野西 眞定

高野山への参詣道（不動坂口）の終

盤に、「花折」と呼ばれる、花を供える場所があった。現在は「花折坂」としてその名を留めている（写真1）。一心院谷口に残る女人堂の五百以下あたりである。明治五年の女人禁制の廃止までは、高野山に参詣する女性達は、ここに花を供え、それから女人堂まで来て、今度は山を巡る結界線を歩き、ところどころ、山内を見下ろすことができる所に来ると、そこから堂塔を望



写真1 花折坂

み見て拝むことしかできなかった。

「花折」とあるが、奈良県吉野郡十津川村では、住民達がこの言葉をよく使っている。墓参りまで「花折」と呼んでいる。この地域の年回法要は神式であるが、これらも「花折」と言っている。よって、この言葉にも広い意味があることが分かる。

さて、高野山の「花折」は何時から始まったのであろうか。もちろん、高野山の女人禁制が始まった時にさかのぼる可能性はあるが、参詣人が増え、諸制度が整った近世を考える必要がある。三寶院の『登山帳』（高野山大学図書館蔵）を調査した結果、当時の女性参詣者の人数を、はっきりと認めることができているので、参考に紹介しておく。この『登山帳』というのは、

宿泊客があった時、これを迎えた各院

の僧が、客とやりとりした事を、こと細かく記述したもので、参詣の実情を知ることのできるすぐれた資料である。宝永二年（一七〇五）から明治七年（一八七四）まで十四冊ある。こうした『登山帳』を整理して金剛峯寺に提出するものが『参詣帳』であるが、この段階では形式化して細かいことは記されておらず、おもしろみがない。

ところで参詣した女性の人数であるが、参詣者総数八千九百九十八人中、わずかに百八十八人で、約五十分の一しかない。それも、明治五年に高野山の女人禁制が解かれ、女性が急に増加した三年間分を加えてのことである。

この数から考えると、「花折」が整備された時期は、後述する宝篋印塔が建立された江戸時代中期の「明和三

年（一七六六）頃であったように思

われてならない。現在、「花折坂」には、不動明王（坐像、中央）と地藏菩薩（坐像、右、共に高さ一・五メートル、石造）の、一般によく見られる尊が祀られている



写真2 花折全景



写真3 花立背面銘文



写真4 宝篋印塔背面銘文

(写真2)。不動明王前の石造花立の正面には大きく「弘法大師御法樂」と刻まれ、その裏に小字で「施主堺茶屋貞心」とある(写真3)。また、地藏菩薩前の花立の正面には「四所明神御寶前」と刻まれ、裏面に同名がみえる。よって、両者は共に同人の寄進だということがわかる。これらのことから、この場所は、高野山全体で行われている、弘法大師と四所明神を拜むのと同じ方式で、庶民からも拜されたということが知られる。

(塔身部)

(基礎部)

ア

大乘妙典一萬部供養塔

不動院
隠居
堯昭

パン

願主
上州

とある。ア・パンの梵字を使っているところは、真言宗系のおいにする。上州不動院の堯昭という僧が建立しているが、この寺院は現在、高野山真言宗名簿になく、詳しいことは分かっていない。もし知っている人があれば、教えていただきたい。

ところで、この「大乘妙典」とは何であろうか。私が今まで見たところでは、「法華経」が一番よく使われている。これは釈尊が最後に説いたもので、経典の中では最も尊いものであるという見解によるためだと考えられる。しかし、この経典は八巻もある長いもので、その全文を一万部も書写するとすれば、堯昭が一生かかってもとてもできないことと思える。

私は、自坊がある兵庫県日本海に面する但馬地区(現豊岡市)を調査していた時代に、各地区の境に、その地区全体を守護する石塔が、よく建立されているのを見かけた。その塔に刻まれた文面には、

パン

大乘妙典供養塔

萬民豊楽

天下泰平

とあり、その下からは、「法華経」の文句を四〜五字ずつ墨書した、丸い小さい河原石がでてくるのが多かった。大勢がこれを分担して書いているのがほとんどであった。研究者はこれを「経石」と呼んでいる。

この例からみると、「南無妙法蓮華経」程度の文句を丸い小石か、小紙に一万枚墨書したものを、堯昭がこの下に埋めたのではないかと、私は考えている。そしてこの石塔を建立するために、堺の茶屋貞心が寄進した可能性も推定される。こうした僧や行者が建立したものは、金銭の余裕のある商人達が寄進している例がよくあるからである。

この花折坂を距離にして十以下った



写真5 道標

ところに、女人堂と大スギ(遊歩道)の分かれ道の道標が立っている(写真5)。そこに「花折坂」にある花立と同じ大きさで、「弘法大師御法樂」「四社明神御法樂」と刻まれた石碑(花立?)が、捨てるように置いてある(写真6・7)。他の字句は一切刻まれていない。おそらく、当初、これらの石碑のみが存在していたところへ、不動院堯昭や茶屋貞心らの参加により、諸仏等を安置する計画が本格的に進んだ結果、この二石が不要になったのではないかと考えられるのである。



写真6 旧花折の弘法大師碑



写真7 旧花折の四社明神碑

後夜の鐘と的場山

高野山には不思議な話が少なからず伝えられています。今回ご紹介するのは、高野山の鎮守である明神さまに関するお話です。

金堂や根本大塔など、密教寺院の主要なお堂が建ち並ぶ伽藍の一郭には、丹生明神と高野明神などを祀る御社があります。伝説によると、山内には夜な夜な仏道修行を妨げる悪魔が出るので、それを高野明神さまが矢を射って退治されているのだそうです。

伽藍の大塔の鐘は、日々五回、重厚な音色を響かせていますが、昔は

子の刻、つまり午前0時頃にも撞かれています。それを「後夜の鐘」と呼んでいました。普通「後夜」とは寅の刻とされ、夜半から夜明け前の午前四時頃をいいますが、ここでいう後夜の鐘とは、子の刻に撞く鐘と限定されています。

明神さまは、山内に後夜の鐘が鳴り響いているあいだ矢を放たれるもので、この時、道を歩いているものがあれば、神罰を被って矢に当たると畏れられていました。ただし矢を避ける方法が一つあって、鐘が鳴りやむまで息を止めて伏せていれば助

かったようです。以上の話は、江戸時代に編さんされた『紀伊続風土記』という書物の中に出てきます。

ところで、近世に制作された高野山絵図の中には、時に「的場」と記されている山が描かれている場合があります。そこには、的らしき「○」が三つ描かれています。絵図上では、高野山の東の端となり「天狗見」という峠の近くであることがわかります。的場山について同じく『紀伊続風土記』をさらに詳しく見ますと、「高野明神の射場といふ 又は影向の地ともいふ」とあり、高野明神が姿を現す山であったことがわかります。さらに、的場山へといたるまでには「矢越の尾」と呼ばれた尾根があったことや、当時の地元の人々の説

として、的場山には時折、新しい矢の跡があり、「的石」というものがあったとも記されています。

的場山の存在は、明神さまといえども、的確に矢を射るのに日頃の鍛錬が必要だったということなのでしょう。しかもそれは矢越の尾を越えるというのですから、高野山内から一直線上に的場山へ向けて矢が放たれたかのように解釈でき、もしそうであるならば、直線距離で約5kmも飛んだことになり、超絶的であったことになります。

● 的場山を探して

明神さまが的場とした山、それが現在のどの山に相当するのかを探ってみることにしました。



伽藍 山王院と明神社 (御社)
拜殿である山王院の奥に御社があります。



版本高野山絵図 文化10年(1813)本
高野山絵図には「的場」と記されていて、的を表現するかと思われる「○」が3つ描かれています。



昭和25年の高野山地図
現在の地図では天狗木峠となっていますが、それ以前では天狗木茶屋と呼んでいたようです。



現在の天狗木峠
和歌山県と奈良県の県境に位置しています。写真左の道の先に的場山があり、この道は奈良県野迫川村中地区へと続きます。



的場山から見えた伽藍、根本大塔
六時の鐘や蛇腹道も見えていそうです。
望遠レンズで撮影



狩場明神像（高野明神）の姿 金剛峯寺

● 伝承の意味するもの
的場山の話は近世になってからクローズアップされたものだと思われる

高野山絵図の「的場」近くにある「天狗見」とは、伝供木、奠供木、天狗木なども記され、昭和二十年前後までは、「天狗木茶屋」と呼ばれていた峠でした。的場山はこの伝供木（以下「天狗木峠」とします）から東北へ七町（約七百六十メートル）行った先にあると、『紀伊統風土記』には記されています。現在の天狗木峠は三叉路となり、東の大峰街道は野追川村中地区へといたる道路が通じています。その道なりに進んだ先に標高一〇三四メートルの山がありますが、状況からすると、この山の的場山である可能性があります。現状、天狗木峠からだると三百メートルになり、七町という記録と実際とはその距離に違いがありますが、昔の街道は現在の車道とは異なっているため、天狗木峠の位置自体も少し違っている

のかも知れません。以上のことから、この的場山とおぼしき山に登ってみることにしました。尾根沿いの道路からつべんまでは数分ですので、登るといってもなく、あつという間の登頂です。頂上には近年に掛けられた札があって、そこには「的場山」と記してありました。地元や山岳会などでは、昔からの場山として認識されているのかも知れません。まさか、的場さんの所有山だから的場山と記しているのではないと思います。ただ、頂上から高野山内が一望できるのではと期待したのですが、残念ながら視界は開けてはいませんでした。あきらめて帰かけた時、木々の隙間から僅かに根本大塔が見えました。目をこすつてさらに良く見ると、蛇腹道も見えていそうな雰囲気です。この山の的場山だと確信した瞬間でした。

ますが、こうした伝説は高野山やその周辺地域の人々によって長いあいだ言い伝えられてきたものではないでしょうか。伝説の裏側に隠されているものは何であるのか、色々と詮索してみますと、興味深いことが見えてきたりもします。
高野明神は狩場明神ともいい、弘法大師空海が高野山を開く際に道案内をしたとの伝承があり、その姿は体が赤黒く、身の丈八尺（二・四メートル）もある、弓矢を持った狩人だったといえます。つまり高野明神は、もともと高野の地を獵場として治めていた狩人の長であったことが想像できます。
的場山の位置するところは、弘法大師自身が少年の日に歩いたという「吉野より南に一日、さらに西に二日行つたところにある高野の地」という内容の記述（『性霊集』巻第九）からすると、高野の地への重要な入口であった可能性があります。仮にこうした想像がゆるされると、狩猟を生業にする古代の人たちにとって、狩場の権利は大切であったはずで、その入口か、または境界にあたる場所に狩猟氏族の的場のようなものがあったとしても不自然ではありません。的場山における狩場明神の影向伝説などを考える時、こうした事柄がベースとなっているのかも知れま



大塔上層階から見た的場山と陣ヶ峰（1105メートル）
現在のように木々が大きくなると的場山は見えづらくなります。的場山が注目される要素としては、木を伐採した時代であった可能性も考えられます。

せん。
今回の、的場山から大塔が望めたところで、逆に伽藍の蛇腹道あたりからほんの僅かに見える山の頂きが、的場山であることがわかりました。明神さまが伽藍から矢を射ると、矢の軌道は蛇腹道を抜けて、ほぼ道なりに奥之院一の橋までを射抜き、そこからの場山へと到達するといったイメージが浮かび上がります。
明神さまは高野山全体と仏法を守護すると共に、お坊さんの学道奨励しておられます。毎夜明神さまによって放たれる矢の伝説と的場山の存在は、時に若い修行僧たちの心におこった怠け心である悪魔を、ずいぶんと退治することになったに違いありません。 (M)

霊宝館の庭園

石楠花・石南木・ホンシヤクナゲ・ツクシシヤクナゲ

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭



ホンシヤクナゲ (満開時)



ツクシヤクナゲ (開花直後)

石楠花は五月下旬になると、たいていのものが花の蕾を保護する苞を裂いて紅色の蕾を現し、ゆつくりと花冠を開き淡紅色の花となることから卯月花の別称があります。

山石の間の陽向かう処に生える故に名づく」という意味のことが。山石の間は良しとして、陽向かう処は程々の所が自生や植栽の適地のようです。

石楠花は弘法大師が開創された高

野山のある高野町の「町の花」であり、奇しくも、お釈迦さま生誕の地ルンビニーのあるネパールの「国花」も、この国の名をラリグラスとする石楠花です。このラリグラスには、幹枝が密に入り組み枝分かれしていることと、ラーマ王子に関わる伝説のあることを、最近入手した書物で知りました。

ところで、石楠花というのはツツジ科の常緑樹の○○シヤクナゲと呼

ばれているものの総称で、単にシヤクナゲと書いてあれば東北・関東・中部地方の一部に自生し、紀伊山地でも植栽されているアズマシヤクナゲ(東石楠花)を指すというのが最近の通説となっています。

金剛三昧院の大石楠花をはじめ、高野山で見(観)ることのできる石楠花のおおかたは、ホンシヤクナゲ(本石楠花)とツクシシヤクナゲ(筑紫石楠花)です。両種の正常な成葉は革質で厚く、表側には深緑色の光沢があり、花冠は七裂し、花色は淡紅色で相い似ています。外見上の一つ

の違いは葉の裏側にあります。葉裏を覗いて淡褐色もしくは灰白色で毛が少ないものはホンシヤクナゲ、葉の裏面が褐色でフェルト状に毛が密生しているのがツクシシヤクナゲです。その位置づけは時代により変遷し、見解の相違はありますが、植物学分類上、ツクシシヤクナゲはアズマシヤクナゲの亜種、ホンシヤクナゲはツクシシヤクナゲの変種とされています。

紀伊半島・和歌山の深山に自生するもの・高野山で植栽されているもののうち、個体数が最も多いとされているホンシヤクナゲのホン(本)は、この樹種の自生分布や学名などから推して「本州を主たる自生地とする」という意味をもつと思われる。

霊宝館の庭園でも石楠花が落葉樹の多彩な新葉とともに、皆様をお迎えします。

(この二枚の写真は両種の葉裏の違いの比較のため特別に撮らせていただいたものです。)